

Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study

藤川, 夏恵

<https://hdl.handle.net/2324/4475043>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (歯学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名	藤川 夏恵			
論 文 名	Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study (「口腔機能低下」の概念に基づく上顎切除患者の咀嚼機能および関連因子の検証：後ろ向き横断研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	築山 能大
	副 査	九州大学	教授	和田 尚久
	副 査	九州大学	教授	柏崎 晴彦

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

顎切除患者の口腔機能はさまざまな方法で評価されてきたが、その評価は、基準が存在せず依然として困難である。本研究の目的は、「口腔機能低下症」の概念に従って、上顎切除患者の咀嚼機能、最大咬合力（MOF）、および最大舌圧（MTP）を客観的に評価し、咀嚼機能と関連する因子を検証することとした。

顎義歯を使用している上顎切除患者 50 人（男性 23 人、女性 27 人：年齢の中央値 72 歳、四分位範囲（IQR）63.75～77 歳）を対象とし、「口腔機能低下症」の診断基準に従い、咀嚼機能、MOF、および MTP の検査値と患者因子（年齢、咬合支持数、および上顎欠損の分布）を診療情報記録より抽出した。「口腔機能低下症」の基準値を超えた患者数と、咀嚼機能、MOF、および MTP に対する咬合支持数および上顎欠損の分布の影響を解析した。また、咀嚼機能と他の因子との関連を評価するために、重回帰分析を行った。

咀嚼機能の中央値（114 mg/dL、IQR: 73-167.5）は「口腔機能低下症」の基準値を超えたが、MOF（229.2 N、IQR: 110.2-419.6）および MTP（25.9 kPa、IQR: 21.4-29.0）は超えなかった。各口腔機能の基準値を超えた患者数は、それぞれ 27 人（咀嚼機能）、8 人（MOF）、12 人（MTP）であった。それぞれの口腔機能において、咬合支持数は統計学的に有意な影響をしていたが、上顎欠損の分布は影響しなかった。さらに重回帰分析により、MOF は咀嚼機能と有意に関連していることが明らかになった（ $P = 0.042$ ）。

本研究では、患者数が少数であるためにその結果には制限があるものの、上顎切除患者の咀嚼機能の中央値は「口腔機能低下症」の基準値を上回ることができ、MOF は咀嚼機能に影響する因子である可能性が明らかとなった。

本研究で得られた結果は、上顎切除患者の咀嚼機能および咬合力、舌圧、咬合支持などの関連因子に関する新しい知見をもたらすものであり、博士（歯学）の学位授与に値する。